



【住 所】京都市左京区聖護院川原町54

【病院長】中村 孝志 先生

【病床数】1,182床

【内視鏡検査数】(平成20年度)上部消化管内視鏡検査5,274件、下部消化管内視鏡検査2,285件、EUS 207件、ERCP 401件、気管支内視鏡検査376件

【スタッフ】医師4名、臨床工学技士(内視鏡技師資格保有)2名、看護師6名(内視鏡技師2名)、技術補佐員(非常勤)2名、内視鏡洗浄員(外部委託:耳鼻咽喉科、泌尿器科対応含)7名(内視鏡技師1名)

高度な内視鏡診療に対応する最新の設備と エキスパートが結集するチーム医療が 国内屈指の治療実績を支える

幅広い領域の内視鏡診療をカバーし 最先端の高度先進医療を実践

京都大学医学部附属病院は、明治32年に京都帝国大学医科大学として創立以来、長きに渡り日本の新しい医療開発のフロンティアとして、基礎研究を臨床に結びつける探索的研究を推進してきました。国内の教育機関の中でも最先端の研究体制を構築し、患者様に役立つ技術の確立を目指しています。

同院の内視鏡部は、疾患の専門別診療体制化の流れを受けて平成3年に設立された光学医療診療部を前身に、平成12年に気管支鏡部門が併設された後、診療内容の明確化を目的に平成19年4月より現在の内視鏡部に改名されました。内視鏡部では同院の消化管、胆膵疾患および呼吸器疾患の内視鏡的診断と治療の全てを担当しており、経験豊かな医師とスタッフで幅広い診療領域をカバーしています。消化器・呼吸器内視鏡検査や治療内視鏡に加え、院内外の緊急内視鏡に対しても24時間体制で対応しています。また、カプセル内視鏡やダブルバルーン内視鏡を用いた小腸疾患の診断や治療、NBIや拡大内視鏡を用いた消化管がんのスクリーニング検査、生体肝移植等の移植医療前後に関わるマネジメントなど、全国でも屈指の高度かつ総合的な先進医療を提供しているのも大きな特長です。内視鏡部副部長の武藤学先生は、「我々は常に患者さんにとって最善の医療を提供することを常に心がけ、内視鏡医療にこだわらず総合的な視点での医療を提供するようにしています。内視鏡部では



内視鏡部副部長
武藤 学 先生

他科から検査や治療を依頼されることも多いのですが、我々は専門家として常に期待される以上のレベルの診療・アドバイスを行うことを使命と考えて実践しています」と、内視鏡部の特長についてご説明いただきました。

最新鋭の内視鏡機器と デジタルファイリングシステムで 安全で質の高い医療サービスを提供

同院の内視鏡室は総面積412㎡を有し、検査室5室とX線透視室2室を備えています。平成20年には内視鏡機器を全面的に一新し、全ての検査室にハイビジョンおよびNBI対応の光源を搭載した内視鏡システムが配置されました。また、近年複雑化の一途をたどる内視鏡検査や治療に対応するために、平成21年には検査室の大幅な改装に加え前処置室とリカバリールームの新設を行いました。

全ての検査室で行われている診療はモニタールームでみることが可能で、内視鏡画像はもちろん心電図や血圧などの生体情報も把握でき、いつでも患者様の状態や内視鏡検査・治療の様子を一括監視できるように配慮されています。これは、若手医師がリアルタイムで症例を学習する点でも有用です。また、院内の診療用電子カルテシステムとネットワーク構築されているデジタルファイリングシステムが稼動しており、院内のどこからでも検査オーダーが可能で、さらに撮影された内視鏡やX線透視画像、検査レポートが内視鏡部専用のサーバーに記録されています。これらのデータは診療科の枠を超えた治療方針の迅速な決定に貢献しているほか、患者様への病状説明にも有効に利用されています。

ハード・ソフト共に徹底した感染対策で 100%の安全と安心を目指す

内視鏡部では近年問題となっている感染対策にも非常に力を入れています。平成21年には院内で使用された全ての内視鏡の洗浄履歴を管理するシステムが稼動し、100%の安全を患者様に提供できるようハード面とソフト面の両方の充実が図られています。武藤先生は、「健診などで来院される方が、内視鏡を介して感染するようなことがあっては本末転倒です。そのため、処置具のディスポーザブル化はもちろん、内視鏡の洗浄や消毒についても常に完全を心がけることは大切です」とお話になりました。内視鏡部では、研修医にはまず内視鏡の洗浄から体験してもらうなど、スタッフだけでなく医師も感染対策に対する意識が高いことが伺えました。



内視鏡部副看護師長・
消化器内視鏡技師
橋村 加陽子 さん



臨床工学技士・
消化器内視鏡技師
新田 孝幸 さん

プロフェッショナルだから何でも言い合える 信頼関係から生まれる強固なチームワーク

内視鏡部のコメディカルスタッフは、それぞれが高い専門的資質を有したプロフェッショナル集団で、医師も絶大の信頼をおいています。2名の臨床工学技士はいずれも内視鏡技師の資格を有し、複雑化する内視鏡診療において迅速かつ適切な機器のセッティングや処置具の準備を行っています。内視鏡部の副看護師長であり、内視鏡技師の資格もお持ちの橋村加陽子さんは、「当院の場合は内視鏡部専属の臨床工学技士が機器の管理を全て行っているのので、私たち看護師は患者様の看護に集中することができますし、医師も安心して検査や治療を行うことができていると思います」とお話になりました。また、臨床工学技士の新田孝幸さんは、「反対に、看護師がしっかり患者様のケアを行ってくれるからこそ、我々が自分の仕事に専念できているとも言えます。年々多様化してきている内視鏡検査、処置に確実に対応するためには、スタッフ一人ひとりがエキスパートとしての専門性を高めることが絶対に必要です。臨床工学技士は内視鏡機

器や処置具の情報および知識を常に更新し、医師や看護師にそれを提供する役割も担っているため、経験の浅い医師には機器の設定や使い方などを症例に応じて適切にアドバイスすることもあります。また、処置で使用する薬剤などについては看護師から学ぶことも多く、そのためスタッフ間で相互に学び合うための勉強会を定期的で開催しています」とご説明いただきました。橋村副看護師長は、「特に治療内視鏡は年々高度化しており、内視鏡部は手術室に近い看護レベルが求められています。そのため、医師とスタッフそれぞれが優れたパフォーマンスを発揮し合うチーム医療を実践することが大切で、ひいてはそれが患者様の利益に繋がると思います。そのためであれば、医師であっても言うべきことはきちんと伝えるのが責務だと考えて日々の仕事をしています」とお話になりました。それぞれがプロフェッショナルとしての職務を全うしながらも、異なる職種への思いやりや感謝を忘れない、そんな温かい人間関係があるからこそ何でも言い合える風通しの良い環境が生まれ、強固なチームワークが育つのではないかと伺えました。



最新機器を備えた内視鏡検査室



集中管理モニター



自動洗浄装置と履歴管理システム